

[B年] 聖霊降臨節第14主日(2023年8月27日)

【旧約聖書日課】

出エジプト記 23章10～13節

¹⁰あなたは六年の間、自分の土地に種を蒔き、産物を取り入れなさい。¹¹しかし、七年目には、それを休ませて、休閑地としなければならない。あなたの民の乏しい者が食べ、残りを野の獣に食べさせるがよい。ぶどう畑、オリーブ畑の場合も同じようにしなければならない。

¹²あなたは六日の間、あなたの仕事を行い、七日目には、仕事をやめねばならない。それは、あなたの牛やろばが休み、女奴隷の子や寄留者が元気を回復するためである。

¹³わたしが命じたことをすべて、あなたたちは守らねばならない。他の神々の名を唱えてはならない。それを口にしてはならない。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙 14章1～9節

¹信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。²何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。³食べる人は、食べない人を軽蔑してはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてはなりません。神はこのような人をも受け入れられたからです。⁴他人の召し使いを裁くとは、いったいあなたは何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人によるのです。しかし、召し使いは立ちます。主は、その人を立たせることがおできになるからです。⁵ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。それは、各自が自分の

心の確信に基づいて決めるべきことです。⁶特定の日を重んじる人は主のために重んじる。食べる人は主のために食べる。神に感謝しているからです。また、食べない人も、主のために食べない。そして、神に感謝しているのです。⁷わたしたちの中には、だれ一人自分のために生きる人はなく、だれ一人自分のために死ぬ人もいません。⁸わたしたちは、生きるかすれば主のために生き、死ぬかすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、わたしたちは主のものです。⁹キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主となられるためです。

【福音書日課】

ルカによる福音書 14章1～6節

¹安息日のことだった。イエスは食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったが、人々はイエスの様子をうかがっていた。²そのとき、イエスの前に水腫を患っている人がいた。³そこで、イエスは律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか。」⁴彼らは黙っていた。すると、イエスは病人の手を取り、病気をいやしてお帰しになった。⁵そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」⁶彼らは、これに対して答えることができなかった。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 23章10～13節

¹⁰六年間は地に種を蒔き、その産物を収穫しなさい。¹¹しかし七年目には地を休ませ、そのままにしておきなさい。そうすれば、あなたの民の貧しい者が食べ、その残りを野の獣が食べることができる。ぶどう畑オリーブ畑も、同じようにしなければならない。¹²六日間はあなたの仕事をし、七日目には休みなさい。そうすれば、あなたの牛やろばは休みを得、女奴隷の子や寄留者は一息つくことができる。

¹³私があなたがたに言ったことすべてに注意を払いなさい。他の神々の名を唱えてはならない。それがあなたの口から聞こえてはならない。

ローマの信徒への手紙 14章1～9節

¹信仰の弱い人を受け入れなさい。その考えを批判してはなりません。²何を食べてもよいと信じている人もいますが、弱い人は野菜だけを食べているのです。³食べる人は、食べない人を軽んじてはならないし、また、食べない人は、食べる人を裁いてもなりません。神がその人を受け入れてくださったのです。⁴他人の召し使いを裁くあなたは、一体何者ですか。召し使いが立つのも倒れるのも、その主人次第です。しかし、召し使いは立つでしょう。主がその人を立たせることがおできになるからです。

⁵ある日を他の日よりも尊ぶ人もいれば、すべての日を同じように考える人もいます。おのおの自分の考えに確信を持つべきです。⁶特定の日を重んじる人は主のために重んじます。

食べる人は主のために食べます。神に感謝しているからです。また、食べない人も主のために食べません。神に感謝しているからです。⁷私たちは誰一人、自分のために生きる人はなく、自分のために死ぬ人もいません。⁸生きるとすれば主のために生き、死ぬとすれば主のために死ぬのです。従って、生きるにしても、死ぬにしても、私たちは主のものです。⁹キリストが死に、そして生きたのは、死んだ人にも生きている人にも主とされるためです。

ルカによる福音書 14章1～6節

¹ある安息日に、イエスが食事のためにファリサイ派のある議員の家にお入りになったときのことである。人々はイエスの様子をうかがっていた。²その時、御前に水腫を患っている人がいた。³イエスは、律法の専門家たちやファリサイ派の人々に言われた。「安息日に病気を治すことは許されているか、いないか。」⁴彼らは黙っていた。すると、イエスはその人を引き寄せ、病気を癒してお帰しになった。⁵そして、言われた。「あなたたちの中に、自分の息子が牛が井戸に落ちたら、安息日だからといって、すぐに引き上げてやらない者がいるだろうか。」⁶彼らは、これに対して答えることができなかった。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・8月27日「聖霊降臨節第14主日」の日課主題は「正しい服従」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「シナイ契約」中の「安息年・安息日」に関する「法」を示す箇所。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、「信仰の弱い人」を受け入れるように教える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「安息日の癒し」に関する論争逸話を伝える箇所。

旧約日課(出エジプト23章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第二巻。「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一の書として位置づけられ、「モーセ誕生物語」から始まり、「過ぎ越しの出来事」を中心とする「エジプト脱出物語」、「シナイ契約」を中心とする「荒野の物語」と展開する。日課箇所は、「シナイ契約」(19~24章)の中に置かれた「法(ミシュパト)」集に収められた法規の一部。「シナイ契約」中の「法」集(21~23章)は、古代オリエント世界で知られる法体系としては網羅的なものではなく、「王の碑文」の一部に象徴的に記された「法」抜粋に類似していると考えられている。

・「安息年」は、「レビ記」25章でも規定されている。「レビ記」の場合は、この規定が拡大されて「7年ごと」の七倍にあたる「49年」は「50年目のヨベルの年」として定められ、すべての債務が帳消しにされる「解放の年」と呼ばれている。日課箇所は、「7年ごとの休耕地」という規定に限定されており、元来は農耕上の知恵として求められてきた規定と考えられる。

・「安息日」は、「出エジプト記」20章および「申命記」5章にある「十戒」でも主要な戒めの一つとして定められているほか、「創世記」2章の天地創造譚においても「創造の七日目の聖別」として告げられており、その神的起源が強調されている。「七日目」ごとの「安息日」を基本とする「ユダヤ暦」は、その起源が、シュメール・ウル第三王朝(前21世紀)時代の「ウンマ暦」から発展した「バビロニア暦」にあると考えられている。バビロニア人は、毎月七日目ごとに特定の神々を祭る「聖なる日」を設け、この日には役人たちを中心にさまざまな活動を制限していたとされる。「ユダヤ暦」の「安息日」規程も、おそらくこのバビロニア人の習慣が起源であると考えられている。

・「安息日」の休息は、家畜や下僕、寄留者の「元気を回復するため」という説明が付されている。「出エジプト記」20章の規定では「神の創造の七日目の安息を記念」するためとされている。他方で日課箇所の説明は、「申命記」5章と並行する。「申命記」5章は、日課箇所と同様の説明に加えて、「あなたがたがエジプトで奴隷・寄留者であったことを想起」するためとされている。

使徒書日課(ローマ14章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、ローマ訪問計画とその後のエスパニア伝道計画への協力を要請するために記した。パウロは、コリント伝道(「使徒言行録」18章など参照)を機にローマ教会共同体出身者と協力関係を持つようになり、宣教方針も独自の主張を抑制して調停的になった。とは言え、当初からコリント教会共同体全体と良好な関係を形成できていたわけではなく、一部のグループとは反目することもあった(「コリントの信徒への手紙一」および「手紙二」を参照)。そのような経緯を、コリント伝道に協力したローマ教会共同体出身者も知っていたはずである。パウロは、それゆえに、自らのローマ訪問を受け入れてもらい、その後のエスパニア伝道への協力を取り付けるために、本書簡を通して、現在の自らの宣教方針が調停的なものであることを明示し、反目していたグループとも協力関係を回復できていることを示そうとしていると考えられる。

・日課箇所では、「信仰の弱い人を受け入れる」ことが説かれているが、それは、いわゆる「信仰心」や「宗教生活の熱心」を問題にしているわけではない。「信仰が弱い人」は、直訳すれば「信頼(ピスティス)が乏しい人」である。パウロはここで具体的には、おもには「食物」の制約や「暦」を守ることに関連して、こだわりを持つ、持たない、という点を問題にしている。パウロは、「コリントの信徒への手紙一」8~10章でも説いているように、「食物」や「暦」などの宗教習慣に関しては基本的に各自の「自由」であること、同時に、他者の宗教習慣へのこだわりを尊重するために自分の「自由」を取って制限するべきときがあるということ、基本的な考えとしている。別の見方をすれば、パウロは、「信仰・信頼(ピスティス)」が各自に主体的「自由」をもたらすものであると理解している。

・信者の中で「野菜だけを食べている」者は、「コリントの信徒への手紙一」8章などで取り上げられている「偶像に供えられた肉を避ける者」のことを指しているのだろう。キリスト者であっても、ユダヤ人であればユダヤ人居住区で取り扱われていた適正処理済みの肉を食べることに抵抗はなかった。しかし、異邦人からキリスト者になった者の中には、ユダヤ人用に処理された肉を入手する習慣がない一方で、異教の祭壇で犠牲とされた後に市場に出回る食肉を食べることに抵抗を感じる者もいたであろう(Ⅰコリ10章を参照)。特に「ローマ人」は、元来から宗教的敬虔な傾向が強く、宗教的なこだわりは強かったとされる。

・「特定の日を重んじる」ことが、具体的に何を指しているのかは不明。通例は、「安息日」などユダヤ人の暦日習慣を指すと解されるが、初期キリスト教会共同体間ですでにさまざまな暦日習慣の違いが生じていたともされ、そのような相違を指しているとも考えられる。

福音書日課(ルカ 14 章より)

・日課箇所は、「安息日の癒し行為」に関する論争逸話として「ルカ福音書」だけが伝えている。「ルカ福音書」は、「安息日の行為」に関する論争逸話を、「共観福音書」に共通する逸話(ルカ 6:1~11)とは別に、13章(13:10 以下)および 14 章(日課箇所)でも重ねて伝えている。「マタイ」と「マルコ」は、共観福音書で共通の逸話(畑の逸話と手の萎えた人の癒しの逸話)しか伝えていないが、細部では「ルカ」が伝える他の逸話の中に共通点が見られる。他方で、「ヨハネ福音書」は、「ベトザタの池の病人の癒し」と「生まれつき目の見えない人の癒し」をどちらも「安息日」のこととして伝えている(ヨハネ 5 章および 9 章)。

・日課箇所は、「安息日の食事の席」を場面設定としているが、この食事は「ファリサイ派のある議員」が設けたものとして描かれている。「ルカ福音書」では、主イエスが「ファリサイ派の人」の食事の席に招かれる場面を、繰り返し設定している(7:36、11:37、14:1)。「マタイ」や「マルコ」でも、食事の席にファリサイ派の人々がやって来て議論をするという場面は描かれるが、「ルカ」は明確に「ファリサイ派の人」が自分の家で主催する食事の席に主イエスを招いたものとして描いている。「ルカ文書」(福音書および使徒言行録)は、概して「ファリサイ派」を好意的に描いている。それに加えて、「ルカ福音書」は、主イエスや弟子たちの教会共同体が大切にしたい「分け隔てしない食事の席」を、主イエスが突然ひらめいて始められたようなものとしてではなく、ユダヤ人たちの中でも「ファリサイ派の人々」が特に大切にしていた食事の営みを継承しながら、「神の国の食事」という理想を掲げて新たにしたいものと位置づけようとしているのだろう。

・3 節「安息日に病気を治すことは律法で許されているか、いないか」という主イエスの発せられた問いは、「マタイ」では手の萎えた人をいやした逸話の中で人々の発した問いとして伝えられている(マタイ 12:10)。これに対応して、5 節の主イエスの言葉と同様の応答を、「マタイ」も置いている(マタイ 12:12)。

来週の誕生日 (8月27日~9月2日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-10 番「今こそ人みな」は、17 世紀ドイツの代表的讃美歌作家 P・ゲルハルトが同時代の教会音楽家 J. クリューガーとのコンビで作った讃美歌の一つ。
- ・21-471 番「勝利をのぞみ」(= ㊦134 番、㊧164 番)は、18 世紀ごろから歌われていた黒人霊歌(もとは労働歌?)が原型となって 1940 年代から広く歌われるようになったと考えられている讃美歌。1960 年代のアメリカ公民権運動の中で盛んに歌われるようになり、教会の讃美歌集にも取り入れられてきたが、近年の讃美歌集では採用されなくなっている。ワシ

ントン大行進(1963 年 8 月 28 日)でこの歌を歌いながら行進する人々の姿が映像で記録されている。

- ・21-500 番「神よ、みまえに」(= I 58 番歌詞)の歌詞は 18 世紀英国の W.ハモンドの作詞。彼は、当初はメソジスト派で、後にモラヴィア派に転じて、讃美歌の作詞・訳詞を手掛けた。旧 58 番とは異なる曲をホーリネス派の文屋知明が作曲して付されている。

21-10「今こそ人みな」**Nun Danket All und Bringet Ehr**

1. Nun danket all und bringet Ehr, / ihr Menschen in der Welt, / dem, dessen Lob der Engel Heer / im Himmel stets vermeldt,
2. Ermuntert euch und singt mit Schall / Gott, unserm höchsten Gut, / der seine Wunder überall / und große Dinge thut.
3. Der uns vom Mutterleibe an / frisch und gesund erhält / und, wo kein Mensch nicht helfen kann, / sich selbst zum Helfer stellt.
4. Der, ob wir ihn gleich hoch betrübt, / doch bleibt gutes Muths, / die Straf erläßt, die Schuld vergibt / und thut uns alles Guts.
5. Er gebe uns ein fröhlich Herz, / erfrische Geist und Sinn, / und werf all Angst, Furcht, Sorg und Schmerz / ins Merres Tiefe hin.
6. Er lasse seinen Frieden ruhn / in Israelis Land, / er gebe Glück zu unserm Thun / und Heil zu allem Stand.
7. Er lasse seine Lieb und Güt / um, bei und mit uns gehn, / was aber ängstet und bemüht, / gar ferne von uns stehn.
8. So lange dieses Leben währt / sei er stets unser Heil / und bleib auch, wann wir von der Erd / abscheiden, unser Theil.
9. Er drucke, wenn das Herze bricht, / Uns unsre Augen zu / und zeig uns drauf sein Angesicht / dort in der ewgen Ruh.

21-471「勝利をのぞみ」**We shall overcome**

1. We shall overcome, we shall overcome,
we shall overcome someday!
Oh, deep in my heart I do believe
we shall overcome someday!
2. We'll walk hand in hand.
3. We shall all be free.
4. We shall live in peace.
5. The Lord will see us through.

21-500「神よ、みまえに」**Lord, we come before Thee now**

1. Lord we come before Thee now, / At Thy feet we humbly bow: / O do not our suit disdain; / Shall we seek Thee, Lord, in vain? / Shall we seek Thee, Lord, in vain?
2. Lord, on Thee our souls depend, / In compassion now descend: / Fill our hearts with Thy rich grace, / Tune our lips to sing Thy praise, / Tune our lips to sing Thy praise.
3. In Thine own appointed way, / Now we seek Thee; here we stay, / Lord, we know not how to go, / Till a blessing Thou bestow, / Till a blessing Thou bestow.
4. Send some message from Thy word, / That may joy and peace afford; / Let Thy Spirit now impart / Full salvation to each heart, / Full salvation to each heart.
5. Comfort those who weep and mourn, / Let the time of joy return; / Heal the sick, the captive free, / Let us all rejoice in Thee, / Let us all rejoice in Thee.